住宅利用者の意見を取り入れた高齢者向けスマートホームに関する研究

○星野雅人（Masato HOSHINO）、中村広幸（Hiroyuki NAKAMURA）
Keywords：スマートホーム、高齢者、インタビュー調査、自律生活支援、モデル提案

1　目的

本研究の目的は高齢者向けスマートホームの利用者の意見をインタビューによって明らかにし、その結果に基づいた新たな高齢者向けスマートホームのモデルを提案することにある。多機能住宅「スマートホーム」はより便利・安心した生活を提供できるとして注目されているが、当分野では技術的側面が先行し、利用者視点の知見が不足している傾向にある[1]。一方、高齢者向けスマートホームは我が国における少子高齢化の諸問題解決へ貢献できるとして注目されている。そこで本研究では、不足した知見を補うため、高齢者向けスマートホームの利用者と想定される人へインタビュー調査を実施し、その結果を基に新たな高齢者向けスマートホームのモデルを提案する。本発表では、現段階での調査結果に基づいた、モデルのプロトタイプを報告する。

2　方法

実査はサービス付き高齢者向け住宅（以下「サ高住」）のスタッフ 9 人及び高齢者の家族 5 人にインタビューを行った。インタビューは、筆者が文献調査等によって作成した高齢者向けスマートホームのモデルを用いてデバイス・システムの説明を行った。本モデルは「状況把握」「セキュリティ」「設備・機器操作」「健康状態把握」「コミュニケーション」の 5 つの分野で構成されている。このモデルを用いてスマートホームデバイスの説明を行った後、対象者個々に各設備への意見を尋ねた。

3　結果

調査の結果、以下のことが言及できる。

・緊急通報システムに関しては、サ高住スタッフ・高齢者の家族共に比較的肯定的な意見が多く、必要性が高いと考えられる。

・サ高住スタッフについて、その役職やデバイスへの理解度によってニーズが異なる傾向が見受けられた。また、設備の管理やスタッフの教育等、導入に対する障壁が明らかになった。

・高齢者の家族について、高齢者とその家族の住んでいる場所の距離や高齢者とその家族の血縁関係によって、導入したいと考えるデバイスが異なっていると推察される。

4　結論

本調査により、高齢者向け施設のスタッフ及び高齢者の家族から見た、高齢者向けスマートホームのニーズが明らかになった。また、それは立場や物理的な距離、心理的な距離等によって変化することも同時に判明した。しかし、各系統の人数が少数であることや、調査対象者の範囲の狭さが懸念点として残る。今後は高齢者を含め、同系統の人々に調査をすると共に、地方自治体職員等、範囲を広げ調査する予定である。

【主要参考文献】

[1]Jung woo,Shina Yuri Park,Daeho Leec, 2018, “Who will be smart home users? An analysis of adoption and diffusion of smart homes”, Technological Forecasting and Social Change, 134, 246-25